

人道主義者として

この半世紀だけでも科學の發達は、著しいものであります。これまで、眞理として、重要視せられた原則も、新學說の發見によつて、根底から覆されたものもあります。しかし、科學者は、これに對して、感激し、喜びこそすれ、たとへ、幾多の歳月を費した、既往の研究でも、それを捨てることに少しの未練を持たない。そして、さらに、新しい發見を基礎として、研究をつゞけるのであります。

眞理の前に、感情に囚はれない、純粹の態度は、眞に、眞理に奉仕するものといはなければなりません。

今日の文化は、かくのごとき科學者の貢獻によつて進められて來ました。發見は、やがて、形の上に現はされたので、藥品に、機械に、種々の方面に製作の發達は、これに伴つたのであります。

されば、私達は、五十年前の都會と今日とを比較するだけでも、その形態の上に著しい變化を見出すと共に、生活内容の差違したことに、むしろ驚くべき程です。これ等の文化の下には、黙々として、學理や技術の研究のために従事した人々があつたからです。すべては、人間生活をより合理的に、向上せしめんとする努力の集積に他ならないのであります。

何といつても、幽暗な世界を明るくしたものは、科學の力でした。萬有に對する知識を得たこともそれですが、單に、それは、燈火一つだけについても言へるのであります。

私達が、原始的な生活をして、行燈の下で書を読み、作業をした時代から、今日のごとく津々浦々に至るまで、電燈の行きわたらざるところないのを考へるだけでも、いかに、世の中が明るくなつたか分りません。

さらに、乗物のごときもさうであつて、汽車時代から、すでに飛行機時代に移りつゝあるではありませんか。かの廣重の描いた東海道五十三次の時分から、幾何の間が

あつたでせう。七十、八十の老人なら、その變遷の甚しい各時代を生きながら經驗した筈です。それにしては、目まぐるしく、慌しいとも言はれる進みやうです。後世に生れる者程、幸福であると言へる譯です。

昔の人の夢想したことが、すでに現實となり、さらに、かぎりなく人間の慾望を實現しやうと、いろ／＼の研究はなされつゝある。しかも、それは、科學の力以外に、可能性はないのであります。この人生にとつて、科學の恵みは、女神以上のものでありませう。たとへ、畫家が、科學を象徴するに、平和な美しい光りを放つ女神をもつてしても、それに不思議はありません。

しかし、科學が、ひとり、人生の平和と幸福と生産のために、その異常な力を發揮してゐるなら、誰も、これに對して疑ひを抱く者はないであらませう。が、科學の發達と、その無限の力に對して、私達は、果して、現在、女神を想像するであらませうか。そして、また、新しい機械が發明されたといふ言葉を聞く時、たゞちに、頭に、利用厚生について考へるだけでせうか。そして、より鋭く、反對に、殺人、破壊、搾取、

失業等については考へないでせうか。

こゝに、問題は存するのであります。

最近、尖銳的な機關銃や、戦慄すべき毒瓦斯などが發明さるゝたびに、科學そのものをすら否定したくなるのであります。すでに、科學の目的が、人生の福祉といふことから離れたからです。

もとより、學問それ自身には、何のかゝりはないのですけれど、人間が、即ち科學者の意志が、第一義の觀念をはなれて、善なる社會のもの、善なる人類のものとならずに、特別のものとしようとするとところから、矛盾を生じたと言はれなければなりません。言ひかへれば人間の良心によつて、使用された時分には科學は女神でありますけれど、冷酷な残忍性によつて使用された時には、惡魔以上に恐怖すべきものとなります。全く感情を持たないからです。

たとへば、人間を乗せて、大洋を航行する汽船に、もしくは交通機關の中樞となるステーションの建築に、商店の巢となり、生活の窟となるビルディングのごときもの

にこそ、近代の科學は、喜びと、やさしみと莊重との具備した輝きを放つて、藝術と握手するけれど、刑務所や、機關銃や、絞首臺や、毒瓦斯装置器のごときものは、いかに、これを美化せんとしても、美化することはできなく、却つて、虚偽と虚飾を含むが故に、一層、不快の感を起させるものです。科學が、かく人生と目的と、反對の役割に、もしくは、一部の人達のために役立つべく使用される時は、いつしか、女神の姿は、煙のごとく消えて、冷酷な惡鬼の姿として印象されるに至るでありませう。

最初から、學問には、かくのごとき性質、感情の伴ふものでありません。すべては、人間の意志の反映であります。そして、もし今日の科學者が、人道主義に立脚し、眞理に對して、敬虔であり、良心によつて行動するならば、人生の平和に反する機械の製造のごときは、拒否しなければならぬと考へます。

しかし、さういふことは、人間のすべてが一つの信條を約束した曉でなければ可能たるを得ないでありませう。たとへ、人生の利用厚生のために、發明された機械でも藥品でも、今日のごとく、一部の人達にだけ使用される時は、本來、平和のために企圖

されたものでも、その意志に反して、それあるがために貧富の懸隔は、ますます甚しくなり、しかも人は、あたりまへのごとく思ひ、また、一方に失業者を生じ、もしくは辛辣な搾取の機關ともなるのであります。

この頃の世相を見るにつけて、私達は、却つて、科學の發達しなかつた、原始時代に生れてゐた方が、より幸福でなかつたかと空想することさへあります。學問のための學問、技巧のための技巧を意味なく思ひます。學問、技巧、共に、社會生活に關聯して、その意義を生じて來るのです。

獨り、科學にかぎらず、政治、法律、藝術等に對して、時々思ひ出されることです。が、「何のための政治か、法律か、藝術か……」と、疑ひを抱くことがたび／＼です。それは、人生のものたらずして、階級のものたることの誤謬から生ずるものです。言ひかへれば、この矛盾を感じず、悩みなくして、何が眞理への奉仕でありませうか？

この意味からして、科學の力によつて、人間を製造し得ると信ずる、科學萬能主義者を眞理への冒讀と考へます。なぜなら、人間の意志あつての科學だからです。

されば、俗人に、容易に、その研究の結果を利用されることなき、天文學者や、物學者の生活、純粹學者の雜念なき生活には、羨まじきものがあります。人間に對して愛と、純情とを持ち、眞理に對して敬虔なるべきは、藝術家も、科學者も、異なるどころがないと思ひます。

愛するものによつて救はる

都會人は、機械を愛するが故に、機械によつて救はれてゐます。市中に生活するものに、完備した下水工事は離すべからざる關係を有するものです。また、水道はなくてはならぬものです。

もし、この二つが缺けてゐたら、どんなに生活の上に、不安を感じるでありませう。しかし、一步、郊外に出て、都市と離れると、さまで、それを不自由とも感じなくなる。下水は、自然に地下に吸ひ込み、水道がなくても、井戸水さへ好ければといふ氣持になつてしまふ。言ひかへれば、田舎の生活に、安立を見出すのであります。自然に親しみ、土を愛する者は、所詮、土によつて救はれることになるのであります。

機械文明が、都市生活に、いよ／＼密接なる關係を有するに従つて、機械は、いよ／＼藝術化され、いよ／＼信頼される結果に至るでありませう。一方、これに反して、

土の親愛を思ふ者は、原始的な生活に、自然と人間の有機的な深い関係を見出すであります。

要するに、信ずることは、救はれることです。都會人は、知識を尊重し、その産出たる機械に信頼を置く故に、下水に、水通に、瓦斯に、電氣に、なんでも、複雑な機械の試験を経たるものでなければ、食べものでも、着るものでも、また、使用するものでも、安心して、これに、生命を托することができないのであります。

これは、幸か、不幸か、いづれであるか分りません。迷信的に、もしくは、盲目的に、自然を信ずる原始生活に比してさへ、幸福といふ上からいへば、多くの疑問を有するごとく考へられます。

それは、別として、いま、夏の自然に聯想して、田舎の、愛するものに救はれる、涼しい事實を語らうと思ひます。

北國に、圍ひ雪といふものがあります。それは、最も、冬の最中に降る、水分の少ない、そして、清淨とされる雪を、かねて、十尺もそれ以下も深く、掘つた穴に埋め、

さらに平地より、丈餘も高く積み上げて、堅く踏み締め、その上に藁にて、幾重にも圍ひ、夏に至つて使用せんとするものです。

北國の平野に、漲る日の光りが、強烈に草の葉を焼いて、あたりが飴色に見え、蟬の鳴聲が、鍋でなにか煮る音を思はせる時、この圍ひの入口が開けられて、雪が賣出されるのでした。村から、町から、大人や、子供等が、箆を抱へて雪を買ひに来る。素裸の大男が、禪一つで、光る鋸の齒を雪にあて、さら／＼と切つて、四角の塊を渡すのであります。炎天の下を、大急ぎで、買ひ人は、歸つて行きます。祭の日に、町角で、この雪を賣る男がある。客は、一錢、二錢と買ふ。すると少く雪を切つて、それに、青い茅の葉を巻きつけてくれる。それは、雪國の夏の情趣にふさはしきものです。

近年、この雪の中に、ばいじんがあるといふので、食用されず、重に、魚を詰るのに用ひるやうになりました。急に、ばいじんが、襲來した譯でもないでせう。田舎の小さな町にも、知識宗が殖えて來たによるものです。そして、機械で製造されたもの

は、譯もなく信ずるによるものです。

アルピニズムの盛なる今日、もし、この雪の斷片を、アルプスの山の雪といつたら、彼等は、どんなに喜ぶでせう。そして、北國の嚴冬の頃、無人の平野に積る雪と、それと、にはさまで變りがあらうとは思はれません。

自然は、雪を降らし、雪を興へて、夏の頃に、彼等の生活を保證すると考へる時に、いかに、自然と人とが親密の關係にあるかと感ずるでありませう。私は、こゝに、相依る離るべからざる、ものゝあるのを知るのであります。

もう一つのこと。それは、この頃、殊に土用時分に、食用される、泥鰌や、鰻であります。いつも食へるときに考へるのですが、東京で一日に、殺して食へる量だけでも非常なものに相違ありません。

大抵は、近縣から輸送されるのですが、田舎には、産なく、耕すに地なき者で、これを捕つて暮らしてゐる者があります。夏の太陽の上らない前に、池や、小川を漁つて、彼等が一日の生活費だけの鮒や、泥鰌を捕つて歸つて來ます。

さういふ人達は、星をいたゞいて、夜、何里も遠いところまで出かけ、どんな川には、なにが棲んでゐるといふことを審かに知つてゐます。また、彼等は、秋になれば、どこの山に茸が出るとか、どの森に鳥が來る、とかいふことを知つてゐます。すべては、原始時代からの生活方法の反覆であるが、しかも、この文明の世に、せち辛い渦巻の中に、餓死することもなく、生をつなぐのは不思議ではありませんか。彼等は、寡欲で、もとより贅澤な生活をしようなどゝは思つてゐません。

スワラヂストの生活に、哲學があるごとく、この生活にも、また哲學があります。すべて眞の信徒といふものは、これを學問として考へずに、實行するごとく、原始生活者も、或は、あまり正直すぎるために、または、所謂無能のために、かゝる生活を餘儀なくされるにすぎぬのであるが、しかも、彼等は、愛するものによつて救はれてゐるのは、疑ふことなき事實であります。なぜなれば、彼等程、自然に親しみ地を愛する者はないからでず。

一方に、機械が、人間と離るべからざる關係を有しつゝある反面には、いよゝ原

始に歸らんとする欲求のあることも否定しがたく、一人の思想のうちにすら、また、日常生活のうちにすら、この矛盾した両面は看取されます。たゞ、私達の生活は、最も愛するものによつて救はれることは事實です。どのみち天道人を殺しません、愛なきものは、生きる信仰も、興味も持たないものです、そして、どちらにも行けぬ生活者こそ、ついに、すべてから、見捨てられるものでありませう。

M 少年の回想

一、ほめられたこと

ある日、隣のお姉さんが、垣根のところ、コスモスの苗を分けて、いゝのから一本、一本、土におろしてゐました。

Mは、そこを通りかゝりますと、育ちのよくない苗が、あはれにも往來の上へ投げ捨てられてゐました。すべての生物に、やさしい太陽ではありましたが、捨てられた苗には、苦痛となつて、見るもいたましく凋れかけてゐたのであります。

『僕が、拾つていつて、植えてやらう』と、少年は、言ひました。同じやうに種子から芽を出して、他の仲間、幸福に、これから長い、夏、秋、の間を咲き誇るであらうものを、捨てられた苗は、このまゝ、枯れて行くのだと考へると、折角與へられた、この草の生命に對して、もつたない氣がしたからであります。

『Mちゃん、もつと、こちらに、いゝ苗がありますから、いくらでもあげますよ』と、

お姉さんは、手をせはしさに、動かしながら言はれました。

「いゝえ、僕、これを植えて置くのです。お姉さん、よく育て、綺麗な花を咲かして見せませうか」

「だめよ。そんなんでは……」

Mは、家に歸ると、土をやはらかに堀つて、凋れかけたコスモスの苗を、四五本、順序よく植えました。そして、それに、水を充分やつたのです。

お姉さんの方のコスモスは、ぐんぐん伸びて行きました。また、日あたりがよかつたから、莖も太く丈夫に出来、葉の光りも、つや／＼してゐます。Mは、まだ、かうした草花に對して、あまゝ経験がなかつたから、氣をつけてやつたにかゝはず、五本のうち二本は、ついに枯れてしまひました。

「やはり、駄目なのかな」

Mは、はじめから發達の不良なものは、やはり、それだけのことしかないのかと、子供心にも考へられましたが、自分が、小さな時分、人なみはづれて病弱だつたのを

祖母や、兩親の丹誠で丈夫になつたと知ると、一つは、丹誠のいかんにもあらうと思ひました。

ある晩のこと、大きなあらしが來ました。M少年は、ふと眼をさまして、コスモスのことを念頭に浮べました。

『かうした際に、助けてやらなければ、何の役に立つものでない。折角大きくなつたのが折れてしまふであらう……』と、思ひましたから、彼は、床から起き上つて、あらしの中へ出てコスモスに棒を立て、支へてやりました。

果して、隣のお姉さんは、夜のことと、どうすることもできなかつたゝめに、翌日になつて見ると、すつかり、根元から折れて、コスモスは地の上に倒されてゐました。

秋 静かな日和となつたのです。Mの育てたコスモスには、美しい、いろ／＼の花が咲きました。そして、垣根の傍を通る人々は、みんな花を眺めて行きました。蝶や、蜻蛉が、花を慕つて、終日、そこを去らうとしません。隣のお姉さんの家のコスモスは、一度折れたゝめに、莖は、曲つて、地の上を逗ふ姿が、亂れてゐました。

『ほんたうに、よく咲いた。かうならなければ見事とはいへない。これは、Mちゃん
の丹誠だ』と隣のお爺さんは、庭さきに遊びに来て、Mをほめられたのです。彼は、
このことを、いまだに忘れずにゐます。

(600)

二、いまだに分らないこと

ある授業時間の際でありました。

『一番奇麗と思つた花を三つと、鳥の名を同じく三つ、紙に書いてごらん下さい』と、
先生は、みんなに向つて、言はれました。これが、小さな子供達に、課せられた、試
験問題だったので。みんなは、思ひ、思ひに、すぐに紙に答を書きましたけれど、
Mには、考へれば、考へる程、分らなくなる問題でありました。なぜなら、どの花も、
よく見る時には、その花特有の美しさを有してゐたからでした。そして、美しくない
ものは、一つもなかつたからです。また、鳥にしても、どの鳥を見ても、その鳥の美
しさがありました。これを考ふるに、自然は、公平に、一つとして、みだりに、これ

等の生物を造らなかつたやうです。この中から、どれが、一番美しいかと、問はれても、
答へられなければ、また、どれが、美しくないとも、言ふことはできなかつたのです。』
彼は、花壇に咲いてゐる花を一つ、一つ、念頭に呼び起しました。赤い花、黄色な
花、紫の花、いづれも奇麗でありました。次に道端に咲いてゐるやうな、うす青い、
可憐な花を念頭に、思ひ浮べました、それにもかぎりない、自然の美しさは、たゞえ
られてゐました。

小鳥にしても、自分の知れるかぎり、すべてが、さうでした。彼は、ついに、いづ
れを奇麗であり、いづれを奇麗でないか、言ひ切ることができなくなりました。

『先生、僕には、分りません』と叫びました。

『分らなければ、○を書いて出さない』と、先生は、急に、不機嫌な、むづかしい
顔付をしました。そして、生徒達は、どつと笑つて、Mの顔を、さげすむやうに見ました。
しかし、彼は、いまだに、この問題について、答へることができないのです。

三、間違つてゐると思つたこと

(601)

何が正しいか、正しくないかといふことも、容易に、判断されないものでありますが、M少年は、このことだけは、Hのお母さんが、悪いと信じてゐます。

彼とHとは、親友でありました。性格は、異つてゐたけれど、そしてよく言ひ争ひをしたけれど、互に、その善良を認めてゐましたから、いつしか、仲直りをして、過去のことは忘れてしまつて、いまゝでのやうに遊んだのでした。

ある時、Hの方が、どちらかといへば、言つたことが道理に合つてゐただけけれど、Mはあく迄、自分の意地を通さうとしました。二人は、互に言ひ争つて譲らなかつたので、ついに罵り合ふまでになりました。

HとMのかうした争ひを、二人は、もとより他に知る者はないと思つたのでした。それなのに、Hのお母さんが、このことを物蔭にゐて、すつかり聞いてゐました。

「うちの子は、本當のことを言つてゐるのだ、弱いからと思つて、あんまり無理を言ふにも程のあるものだ、どれ、私が、相手を叱つてやらう……」
不意に、そこへHのお母さんが出て、Mの顔を睨み付けました。

「私は、さつきから、二人の言ひ合つてゐるのを聞いてゐました。Mさん、お前さんが善くないのですよ」

かう怒鳴られると、Mは、顔を赤くして、下を向き、ついに居たゝまらなくなつて、逃げて歸りました。Hは、また母のしたことをうれいとは思はなかつた。何となく、氣恥しい感じがして、自分が、悪くもないのに、急に聲を立て、しく／＼と泣いたのです。

このことがあつてから、二人の少年は、もはや、いまゝでのやうにならなかつたのでした。そして、だん／＼間が離れて行きました。Mは、二たび、Hの家へたづねて行くこともなかつたから、Hも、同じやうに來なくなりました。

いつしか、顔を見ても、互に、知らない人のごとくなつてしまつた。何が、二人をこんなにさせたか？これについては、Mは、たび／＼思つたのであります。

Hのお母さんさへ、あの時、二人の間へ出なかつたら、すぐに、二人は、争つたことなど忘れて、仲よくなつたであらう。お母さんは、何のために、餘計な口を出して、

私を睨んだのだらうか？」

子供には、子供の世界がある。大人には、ちよつとその世界が分らない。生なか、干渉したゝめに、子供の氣分を損し、取返しのつかないことにする。その罪は、子供の世界を理解しなかつた者に、あることは、言ふまでもありません。

Mは、Hと仲よく遊んだ、當時を思ひ返すと、なつかしさに堪えられませんでした。そして、もう、一度、あの時分の生活に立返へりたいと、心に願ひましたけれど、それは、畢竟、空しい望みに過ぎませんでした。

このことを思ふたびに、Hのお母さんの行爲を間違つてゐたと考へずにはゐられません。何といつても、——たとへ、Hのお母さんの言はれたことに道理があらうとも、たしかに、その行爲は、間違つたと信じてゐます。

燈火とおもひで

あの妙高山の下に、燕温泉といふのがあります。赤倉、關、燕、これ等の温泉場はスキーの流行以來、人々に知られてゐますが、その中でも、燕温泉は、停車場から、最も遠く、三里ばかり、山の中にはいつて行かなければならぬので、今より、二十年前は、溪川のふちに建てられた、粗末な小舎普譜であつて、全く開けてゐませんでした。

燈火も、石油ランプを用ひずに、うす暗い行燈をともしてゐました。夜は、その下で、尺八を吹いたり、松前追分をうたつたりしてゐました。星の光りが、夏でも、すでに秋らしい高い山の頂きにきらめき、石に碎ける水の音が、いつでも雨が降り、風が吹いてゐるやうに淅々と鳴り、坂道を登つたり、降つたりする按摩の笛の音が旅の哀愁をそゝつたのであります。

晝間は、怠屈まぎれに、開け放つた室の中で、浴客が、兩肌をぬいで、對し合つて將棋をさしてゐました。それは、いかにもなつかしい光景だったが、私は、夜になると行燈のうす暗いのに堪へられなかつたのです。

「はやく、家へ歸りたいな」と、母に言ひました。

「せつかく來たのだから、七日間は、湯治していかなければならぬ」と、はやく歸つたのでは、湯のきゝめがないといふので、母は、機嫌をとつて私の氣をまぎらせようとしてました。

少し、山に上ると、石角や、日蔭のところには、白い梅鉢草の花や、赤いこけもの實かなつてゐました。このあたりは、日に幾たびとなく霧が降つたり、はれたりしてゐたのです。

それ等の高山植物は、かぎりない喜びと、新鮮さとを與へました。不自由な、幽暗な湯治生活にも大分なれたころ、學校の暑中休暇は終りに近づいて、歸らなければならなかつた。その時は、知り合になつた隣室の人達に別れるのが悲しくて、この次は

いつ遇はれようといふやうな感じがしたのであります。

私の村には、森や、林がありました。夏の晩方になると、蝸が夕空にひびくやうに鳴きました。きまつて、その刻限に、町から、男が、天秤に、二つのブリキ罐をかついで、石油を賣りに來たのです。

「もう、晩方になつたな」と、いふ感じが、この男を見ると、持たれたのでした。

家々の戸口から、ランプの壺を持つて出ます。男は、壺に漏斗をさして、楯になみ／＼と石油をいれて注ぎます。私は、石油の青い色と香がすきで、走つて行つて、男が一つ、一つのランプの壺に石油をいれるのを、飽かずにながめてゐました。

どこの家にも、小さな石油罐は置いてありましたが、買ひ置きができなかつたり、火の氣を怖れたりして、毎日、かうして、少しづつ買ふところもありました。

釣ランプに、臺ランプ、ランプに二種類あつて、釣金にかけて、つるすのは、子供が不意に立ち上るときなど、頭をぶつけ、火をあびるのを危険がられてゐました。また、臺ランプも同様に倒れたが最後、火事となるものとされてゐました。

石油壺を硝子から、ニッケル製に改造されたりしたけれど、石油のあるなしが、よく見はかれないので、やはり硝子製を使ふことは止められませんでした。

三分心、五分心といったふうには、石油ランプの油を吸ひ上げる心の太さと幅さから光度に非常の相違がありました。父が、まる心の、ニッケル製の釣ランプを町から買って来て、室内に點した時、みんなは、こんな明るいものがあらうかと思つた程です。かうして、石油ランプ時代の人々は、蠟燭時代を笑つたではありませんか？ 一分心の豆ランプの光りでも、ひら／＼動く蠟燭の火よりは、いくら明るいかわれなかつたからです。

いまでは、暗い廊下を通つて、便所に行く場合などに懐中電燈を使用するごとく、その當時はカンテラを下げて、祖母が、つれて行つてくれたものです。

過去の記憶をたどると、石油ランプの時代は、まだ、このごろまでとあつたやうな気がします。

明治三十四五年頃には、上野から、新橋までの大通りを鐵道馬車が往復してゐました。電車の出来たのは、それから、二三年も後のことでした。まだ、東京には、ところ／＼に、江戸時代の名物が残存してゐました。従つて、廣重の版畫にあるやうな面影が、諸處に見られたのです。はじめて、田舎から出た者は、流石に都會の賑やかさに驚いて、馬車や、人力車の交通のはげしいのを感じましたが、何といつても、その頃は交通機關は、未熟であつて、發達の過程にありました。だから、早稻田邊から、半日が／＼歩いて、日本橋通りの丸善へ、洋書を買ひに行つたり、また、上野の山へ散歩に出かけたりしましたが、さまで遠いとも考へなかつたのです。交通機關が發達してからは、近距離も歩くのが容易なことでないやうに思はれました。それは、贅澤といふより、危険に對して、神経を勞するので、極めて、自然のことかも知れませんかやうど、その頃、私は上京して早稲田に入學しました。まだ下宿屋に電燈の來てゐるところは少く、石油ランプを點してゐました。

引越しの時分に、ランプを片手に持つて、荷車の後からついて行つた記憶が、あり／＼と残つてゐます。そして、はじめて、電燈のついた時、それは、どんな喜びであ

つたでせう。五燭の電燈でも、たいそうな明るさでした。ずっと後まで、學生はたいいてい五燭をつけてゐたものです。料金が、次第に安くなり、環境の明るさになれるに従つて、五燭では、暗くなりました。しかし、石油ランプのことを思へば慾張りすぎるものがあります。

日露戦争後、日本の資本主義は發達し、文化は開けたのでした。そして、街の中は明るくなりました。ビールや、藥の廣告に、五燭の電燈を利用して、都會の夜を彩ることも、いまなら、決して珍しいことではないが、そのころは、ど／＼に美しくまた不思議にも思つたでせう。

新聞社に夜勤をして、私は、毎夜のやうに銀座から歩いて牛込辨天町の下宿に歸りました。電車のなくなつた十二時過の街の中は、しんとして、一人の通行する影も見えなかつた。たゞ、自分の足音が、闇の中に反響するのを聞くばかりでした。

「出てから後に、何か事件が起つて、電話がかゝらなかつたかな」と、さまざまのことを空想すると、一見、靜寂に寢靜つてゐるとき巷の中で、或は痴情關係から、

今晚にも血腥い事件の突發することが想像されたのでした。

やがて、神田の通りをすぎて、飯田町に出て牛込見附に来る時分は、すでに午前三時にも近かつたので、夏の夜の空は、蒼白に更けて曉の近づいたのを知らせてゐます。獨り、飯田橋河岸に建てられた仁丹の廣告燈が生きてゐるものゝごとく、赤、青に、音なく變りつゝありました。私は橋の欄干に凭れて、ちつとそれを見ながら、ますます頭が澄み、眼の冴えて行く、病的な自分をそれと比較したのでした。

その後、市中には電車道が、次第に網の目のやうに敷かれ、大正博覽會時分には、不忍の地畔は、イルミネーションで不夜城を現出しました。「その頃から、街はますます明るくなりました。獨り、都會にかぎらず、山河に富む日本國中がやうやく電燈化して、この頃では、餘程の不便な土地でもなければ、石油ランプを使用してゐないやうです。

しかし、田舎に居住する時分には、二丁や三丁の道は、提燈なしで、暗がり歩いたものですが、幾年も田舎の生活から、全く遠ざかり、明るい都會に居住してから、

夜は、燈火なしでは歩けなくなりしました。

稀に、自分は、乗物にのりながら、田舎の人が、暗い道を燈火なしで歩いてゐるのを見ると不思議と、その大膽さに感心するのです。遠い田舎どころでなく、軒燈や街燈の乏しい、暗い郊外には住めないのです。慣れればなんでもないのであります。せうが、私は、最も明るい街を好みます。

いくら舊弊な人でも、電燈の便利をたへぬはなからうに、たま／＼よく散歩する町に、一軒の古道具屋があつて、店は、うす暗くむさくるしく、棚に、いくつか佛像をならべてゐるのがありました。どういふものか、この家ばかりは、いつまでも、石油ランプをともししてゐました。

恐らく、この町内で、當時、石油ランプを使用してゐるのは、この家だけであつたでせう。大正二三年の頃のことでありました。

その家の主人は、餘程の變りものであつたにちがひありません。そして、夜は早くから半分も戸を閉めてゐました。僅かに、煤けたランプの下で、人の動く氣はいがし

たのです。それですから、晝間でなければ、棚の上に置かれた、佛像を見ることはできません。

いつであつたか、立止つて、その棚を仰ぐと五六個ばかり、黒色に時代のついた佛像が貴いものゝやうに、眼に映りました。誰しも、かうした店に、かうして並べられたのを見れば、

「堀出ものをしてやらう……」と、いふ氣が起るものです。そして、値をきいて見て、案外高いのにおどろきます。しかも、こゝにあつたのは、手や、足が缺けてゐた姿の満足のもものが少く、時代も、さうたいして古いものではなかつたのです。

佛像と關係なく、さうした生活から、この店は、何となく一種の興味を惹きました。が、そのうちに、市區改正になつたので、かうして、いつまでも時代に抗したのも、いつの間にか、どこへか行つて、そこにゐなくなりました。その後、その跡には、文化的な建築が軒を並べて出來ました。夜は、無数の電燈に照らし出されて車や、人間の群が雜踏してゐます。

街の時計

(614)

十字街のにぎやかな畔りに、時計臺がありました。その上にあつた、大きな時計は、正確な標準時計となつてゐました。

時計は、夜が明けると人間が、下の往來を急しさうに、蟻のつながらるやうに、歩くのを見ました。たま／＼立どまつて自分を仰ぐものがあると、

「あの男は、おれを見て、自分の時計を直すのだな」と思ひました。

時計が、さう思つた通りに、その男は、時計の時間を合せたのです。また、なかには、たゞ見たばかりで安心して行く者もありました。

「あの人は、約束の時間に、まだ間があるので、安心して行くのだな」と、時計は、その様子で悟ることができました。

自分が、この街の人達に、役に立つてゐると考へると、なんとなく誇らしい氣持になりました。そして、一層、はれ／＼しく朝の日の光りに、冴えた顔をしたのであります。

おしやべりの雀は、よく、その頭の上にとまつて、

「時計さん、もう春ですよ。ごらんなさい。あんなに街の中が、美しく、陽氣になつて見えるぢやありませんか」と、話かけました。

「おれには、春も、冬も、ない。いつもおなじことだ」と、時計はぶあいさうに答へました。すると、雀は、口やかましく、

「さうではありません。人達は、冬になるとあなたの顔を見て、こんなに日が短くなつたといひます。そして、春になると、また、あなたの顔を見て、あゝ日が長くなつたことと言ひます。ちやうど、あなたが、日を長くしたり、短くしたりするやうにでも思つてゐるやうに」

時計は、さう聞くと、馬鹿々々しくなりました。それに、自分が、忠實に働いてゐることを誰もあたりまへのやうに思つてゐる。下の街を見ると、草花屋の店さきに女も、男も立止つて、花をながめたり、手に取りあげて香をかいだりしてゐる。あの

(615)

花が、この街の人達に、どんな役に立つかと思ふと、ほんたうに、馬鹿々々しくなりました。

「あゝ、つまらないな」と、時計は、ため息をしたやうに、二時を打ちました。

「あまり正直にすると損ですよ。ちつとは、狂つて、有がたみを教へておやんなさい」と、雀は、言つて、時計をおだてました。

「よし、おれは、おくれてやらう」と、時計は怠けはじめました。

相變らず街の中は雑沓しました。人々は、時計を仰いで、往つたり來たりしました。しかし、正確な、標準時計が狂つたので、其日は、汽車におくれたり、取引に差支を生じたりして、大變なことが生じました。時計は、復讐をしましたが、同時に、とり下されて、明日から、廢物となつてしまつたのです。

童話創作の態度

私は講演をしつけませんから、思つてゐることが、よく言へるかどうかわかりません。兒童を教化する上に、最も必要なものは愛と眞實であると思ひます。そして、同じ愛と眞實を以て教化する場合にも、知識と情操を練る場合は、夫々異なるものがあります。知識を教へる場合は「こうすべきだ」「こういふものだ」と、愛と眞實を以て傳へるにしても其處には多少命令的なもの、勢ほひ強壓的ともなるのです。然るに情操方面の教化はむしろ、兒童自からの良心に訴へて、その内發に俟つものであります。この意味で知識を教へることを色々の學課に求めたなら、この情緒の涵養は、文藝の任務と思ひます。然らば、自然的自由の間に兒童の自覺的情緒に俟つとは如何なる形を執るか、例ば大自然の中に誰の監視も無く自由に子供が歩いてゐるとする。道端には花が咲き林には鳥が囀ぶり、小川さへ流れてゐる。この中で子供はそれを觀聽して自然を

知り、それについて考へ、また空想を楽しむのが自然の状態であります。然らばこれを作品に求めるとしたら、その作品の姿は極めて自然でなければなりません、即ち、その作品を児童が讀むうちに何時しか作品に魅せられ、誰が書いてゐるか、いかなる目的で書いてゐるのかといふことを忘れ、すべて自ら感じ、即ち子供がそれについて空想し、考へ、自然に子供自らがその中に這入つて悟るのであります。作家が、凡そさうした作品を作る時分には、先づ、作家の頭に刺戟があるのであります。その刺戟が或る途上の觀察である時もあり、一寸した音色が動機となる時もあります。これ等のどんなものでも、作家の頭に刺戟を興へ、やがて、聯想を生み想像を呼ぶのであります。それが自然に組立てられ單純化されて自然性を生む場合もありますが、あまり他の色々な材料が入り込んで複雑し、容易に統一されない場合もあります。が、兎に角それ等は時間的に自然的に統一されるものであります。たとへば、恰度青い果物が時を経れば成熟する如く、長い間、頭の中になれば、いつか單純化されるのであります。この時分には、作家はある歡びを以て製作にかゝることができます。凡そ物を製

作するには、必ず一つの歡びを伴ふのが本當だと思ひます。此の頃ではいろいろの事情から、作るといふことに時間的の制限をされますが、本當は材料が極めて長い間頭に在つて、自然に醗酵した時に喜びをもつて表現すべきであらうと思ひます。かゝる作品がまた児童に讀まれる時には、必ずや、児童は自然に觸れ作者の感じた自然も感じを享けるであります。故にかゝる作品には、その作者の人格が必然的に背景となつて現れるのです。あの古い昔話が何故に子供に歡ばれるか、それについて考へるとそれは物語の傳へられる長い間に、不必要なものは取りのけられて、單純化され、必要なものゝみが残つた事から、自然に子供の頭に無理なく入ることに原因しますが、その筋や、事件以外に、人間の心臓から心臓に傳る間に、人間の優しみや、ユウモラスや、正義感等がその作品に附着して來る爲でもあります。桃太郎の話にせよ浦島太郎の話にせよ、思ふに最初の筋丈の魅力でないのです。長い人間の心臓を経て來た話には、人間味・滑稽味・正義感といふやうなものが加はつて、そのために児童が魅せられるのであります。その話にしても、語られる場合には、若い兄弟達から聴くより、

父母、更らに祖父母等から大きく方が歡び多いのは、なぜでせうか。それは、祖父母な
どには、もはや仕事も無く、慌しさもなく、時間に餘裕を持つて、孫達に心からの愛
をつくしてきかすことができるからであります。このやうに話の筋のみでなく、語る
人の人格的な愛がその話題に魅力を生ずるのであります。そのやうに作品も、筋や、
技巧のみでなく、その作家の持つ人格の浸潤が魅力となり輝くのであります。現在は
ラジオによつて、機械を介して、童話を傳へ聽かせます。もし筋だけや、智識の上だ
けなら、それも子供には面白いのですが、更に教化上から考へる時には、やはり互
に顔と顔を見合つて、愛を以つて語られる方が印象が深く、効果があるのであります。
其處には機械の持たない深い人間味が現れるからであります。

次には、童話創作上に必要の條件として、「童心」といふことについて言ひ度いと思
ひます。これは、しばらくいかなるものが「童心」であるかといふことが問題にされて
ゐますが、これを説明するには、例へば、人間が犬・猫・雲・植物もしくは、無生物等に
對して、呼びかけてもあかしくないものがある。又それを聽く者が第三者としても、

愚かしいとは感ぜず、眞面目に自然にきくといふ所に童心があるのであります。聽く
人、語る人、その共感する所以のものは、童心があるからで、こゝに純朴な童心の世
界があるのです。科學偏重の時代に在つては、之を單なる空想夢想と云つて了ふが、
事實、實世界に、かゝる共感の世界がある以上、私は童心を否定することが出来ません。
尙、童話創作上最も必要な條件は、子供自身の心持、子供自身の世界をよく理解する
ことでありませう。私達は、かつて子供であり、子供の生活をしてゐた時分、大人や兩
親や先生等が、どうして自分のこんな心持が判らぬのだらうと、不思議に思つたこと
さへありましたでせう。ちよつとしたことを例にとつて言へば、苦心してやつと堀つ
て來た木や竹の根、道端の石ころ、籾の中で捕へた美しい蟲等、大事に藏つて置くの
を家の人は、いつの間にか、だまつて捨てゝ了ふ。これはどんな子供にもある經驗で
はあるが、總て大人になるとその頃を忘れられて了ふのです。現社會では、やうやく
兒童の擁護が盛んに唱へられて來ました。然しそれは單に外面的な方面の施設であつ
て、内面的に子供を眞に愛撫するのは、獨り、良心を基礎とした教育、藝術の使命で

あると考へます。

次に童話文學には、必然的に郷土色が加味されるのです。童話は散文ではありませんけれど、それ自身が詩であると考へられます、然してこれの作家の多くはロマンチストたるべきだと考へます。獨りロマンチストでなくとも、誰しも生れた故郷には特殊の愛着を持つものです。その人が理想家であり、また、レアリストであつて、生れ故郷に容れられずとし、そこに多くの缺點をみ出し、希望を彼方に抱き、郷土を捨て、他に彷徨するやうな革命的な人間であつても、自分の生れた故國以外のいかなる土地に、果して理想を見出し得たでありませうか、そこに文明の虚偽、假面を見る。いはゞ、人間の世界は至る處勞働と賃金の生活の世界であつて、夢想したやうな理想生活の見出せよう筈が無いのであります。却つて、この時にこそ考へるのは母の犠牲的愛であり、郷土隣人の相互扶助と情緒的團結の生活であり子供時代に浸つた自然であります。これ等を思ひ出すことは、せめても流浪の旅人に取つても喜びでなければなりません。これは總ての人の持つ心なのであります。人は誰しもさうであるが、

少くとも童話を創作する人は、その中でもロマンチストたるべきであります。従つて、多くの愛着と特種の回想を持ちます。國々で生活が違ひ、生える植物の姿、また風俗も異なるのであります。さうした特殊な自然に觀察を向け、經驗を描き、愛着を感じるのが藝術家であります。私は北國に生れましたが、日本海の波の音、冬の晩方、軒下を通る旅人の草鞋の音等を想ひ出します。これは北國に生れた子供等でなくては回想出来ないものであります。今限りなき懐しみと同時に、其處に生活する人の姿を思ひ出して、作品の中に描く時は、有機的な血と肉との關係をさへ持つものであつて、郷土色は、故郷に懐しみを持つ人の描く時には、必然に現はれるものと思ひます。藝術の上に、民族的色彩あるといふことは、誇りとなつても決して不要のことではありません。此の頃のやうに機械文明が發達し、交通の自由は國交を開發し、一日千里を行かしむ時代に於きましては、風俗にも、經濟にも期せずして共通なものが生じて、日々郷土的色彩は失はれつゝ行きます。科學的にのみ物を見れば、こうなるのが當然で真理の存するところだといふことになりまされど、之は考へ方が間違つてをりま

す。文明の進出と共に經濟的統一は今日止むを得ぬ状態ではありますが、文明のために個性を失はれる事は甚しい矛盾であります。或る民族の部落が、特殊的美、個性を持つ時にこそその民族或は部落の獨自的存在價值があるのです、その郷土から、その民族の特質を取つて了ふ時に何が後に存在するでせうか、單純な理論上の個條的幸福のみでは人間はそれを、眞の幸福と感ぜられない。またそれだけで人間の世界は考へられないのです。何が幸福か？個性を殺し、美の特種性を殺して、幸福があり得るか。故に、私は巧利的な立場に立ち、若くは強權的イデオロギイ文學は純正の藝術ではなく、人間獨自の生活を意識し、善と美の良心を基礎とした、個性情緒の結合を目的とする人道主義的精神の輝きあるものを眞の藝術だと思ふのであります。概念で人間の特質や感情を排斥する藝術は、他に政治的の任命にあるとしても、純正の藝術ではありません。

次に作品の明るさ暗さが問題となるのですが、これもその筋が如何に活潑でも文章が燦爛でも、それだけで明るいといふことはできなく、明暗はその作品の性質即ち内

容の持つ、思想、解決、希望、いはゞ精神で定まるのであります。それは、個人の場合でも、また、社會の場合でも、さうであります。本當の明るさを持つ人は、未來に希望を持つ信念を或は理想を持つ人であります。明るい社會といふのもまたさうであります。現在は、いかに苦しくても、未來に約束があり、光明があれば、健全といへるでせう。作品も又さうであつて、文章が平易だからといつて必ずしもそれが明るいものとは云はれないのです。その作品のもつ信念希望によつて定まるものであります。文字の使用には、その作家の性癖といふものがあります。

次に童話は、のみならず、すべて児童文藝は、児童に初めから妥協する考へであつてはならない。なぜなら、正しく又美しい事には大人も子供も共に同感すべきだからであります。恰度一つの美しい花が子供にもまた大人にも美しく見える如く、單純な正や美には差がないものです。今日の商品雑誌の、少からず児童に迎合する如き傾向は必ずしも、児童の眞の趣味娛樂を以て撰擇したものでなく、むしろ大人の要求や、興味が反響したといへるものがあります。今の子供が獵奇的や、英雄主義や、冒險や、

鬭争的のことや、その他これに類するものを愛好するのは、資本主義的チャイナリズムに感染した大人の心が反映した結果であります。子供は正義や、美に對しては、常に、大人より敏感なのでありますから、今日の傾向を兒童の本能的のものとばかり思つて、誤れる解釋から、妥協する必要なく、作家が一たび、嚴正な認識と批判に立つかぎり、これが本當だ正しいものだと思つたと信じたところを曲げずに、眞實と愛の素朴性を失はずに眞面目に書くべきであります。

次に用言に就て申し上げます。やはり言葉は、廣く兒童に讀れる爲めには標準語がよいと思ひます。たとへ、郷土や田舎のことを書くからといつて、殊更らに判りにくい地方の言葉で寫實する必要はありません。この場合、たゞ、田舎の情景を偲ぶに足る言葉をもつてすればよいのです。

最後に云ひたいことは、新しい童話の意義と、文藝上の地位についてです。今迄兒童文學中でも童話は、或ものは巧利のために、或ひは目的意識の爲に、書かれましたので、これを、獨立した藝術として考へられ、認められませんでした。然し在來昔か

らの童話でも、單純素朴な優しさと、正義、正直を基本として、人生を見ようとしてゐました。この本質を失はずに、更に新しい感覺の世界を開拓して取入れ美の内容を豊富にし、そして、これによつて人間同志の情緒結合を目的とするやうな兒童文學の進出が望ましいと思ひます。現在の小説、戯曲、藝術、の多くは大人のみを對象としての娛樂であります。兒童の世界を顧みて、兒童獨自の世界を擁護して、新社會を建設する者のために、新しい童話文學が開拓されて欲しいと思ひます。それはやはり大人が、いつも經濟力を握つてゐて、子供は、與へられる立場になるからで、また、眞に子供の世界を理解し、彼等の代辯たらんとする者が無かつたからであります。従つて子供の文學といへば、片手間に、小使錢取り位の考へでなされた事に原因してゐるのです。しかし、いま言ふやうに、特異の散文詩形として、純朴美に立つところの藝術、それが良い成果を收めた曉は、それは獨り子供に出發點を與へるのみならず、一般民衆の文化的革新ともなることを考へられます。それには今後兒童藝術に關心する人達は正しい批判に立ち、眞劍な態度で兒童文學にたづさはり、一つの獨立した、

純粹藝術としての、児童文學を作るべくお骨折頂きたいと存じます。

昭和七年七月十五日 印刷
昭和七年七月二十日 發行

童話雜感及小品

【定價貳圓五拾錢】

不許複製



著者 小川未明

發行者 東京市本郷區彌生町三番地 會根松太郎

印刷者 東京市四谷區本村町四番地 鈴木芳太郎

發行所

東京市本郷區
彌生町三番地

文化書房

振替口座東京
二五四七三番

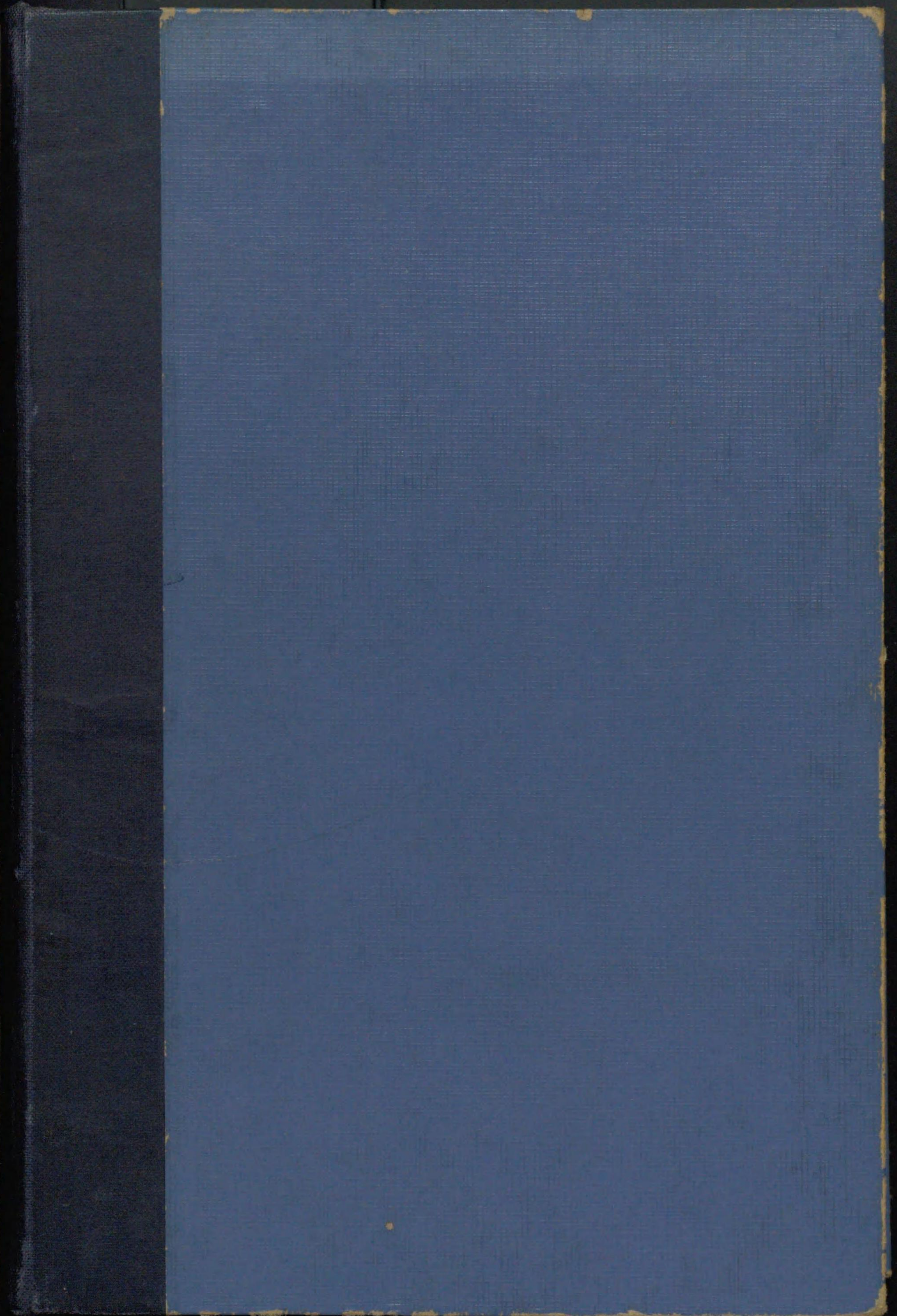
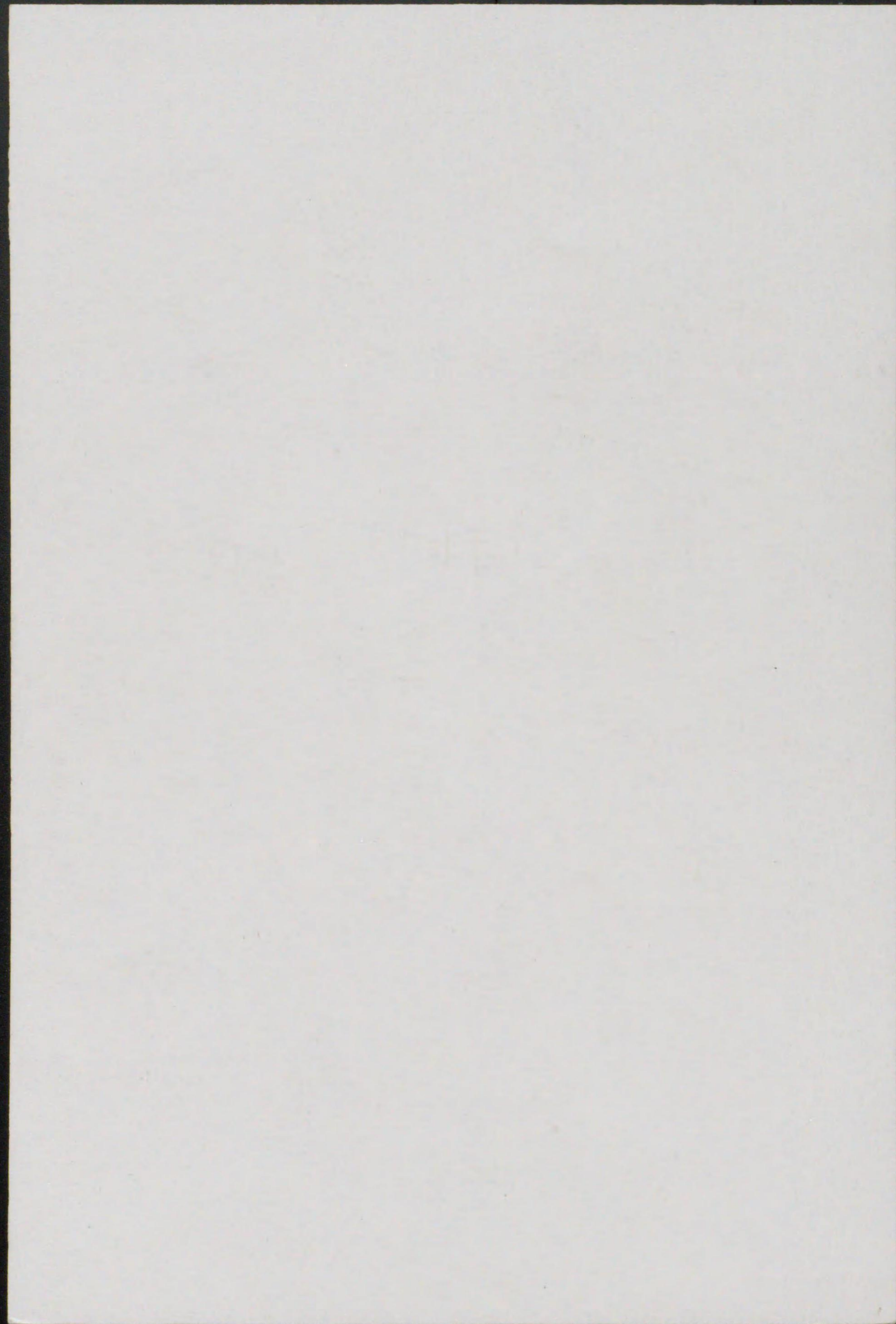
印刷所 支眞社印刷所

日本童話協會	湯淺城二著	日本童謡社編	尾關岩二著	吉松祐一著	同	内山憲堂著	同	芦谷重常著
模範口演童話選集	教師用尋一の新童話	日本童謡讀本 <small>尋一、尋二、尋三、尋四、尋五、尋六</small>	童心藝術概論	學校に於ける童話の活用	新童話術綱要	兒童大會と司會法	宗教童話の研究	童話學
定價金 貳圓 郵税金 十二錢	定價金 貳圓貳拾錢 郵税金 十二錢	定價各金 七拾錢 郵税金 各金 六錢	定價金 貳圓 郵税金 十二錢	定價金 貳圓六拾錢 郵送金 十二錢	定價金 壹圓參十錢 郵税金 八錢	定價金 壹圓八拾錢 郵税金 十錢	定價金 貳圓 郵税金 十二錢	定價金 貳圓六拾錢 郵送料金 十四錢
發行所 東京市東區生彌町三番地 文藝書房 <small>東京市東區生彌町三番地</small>								

6
1

620

161

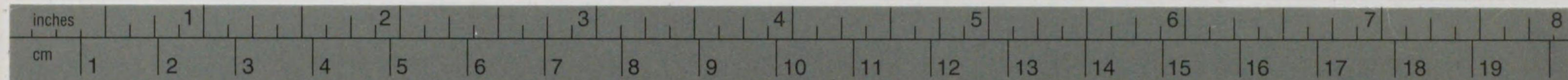


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

